

○ダニ類（ハダニ類を除く）

チャノホコリダニ *Polyphagotarsonemus latus* (Banks)

（１）本県での発生状況

露地、施設ともに発生するが、施設での被害が多く、ナス科野菜類、ウリ科野菜類、イチゴなど果菜類での被害が大きい。

（２）形態及び生態、被害の様子

淡黄褐色の微小なダニで、成虫の体長は雄に比べて雌がやや大きく 0.25mm 程度。卵は扁平で表面に気泡状の小突起を有し、植物体に固着している。成・幼虫が葉や成長点を吸汁し、葉の奇形化や灰褐色皸肌状の被害果を生じさせる。イヌビユやクローバーなどの雑草やサザンカなどに寄生し、これらで繁殖した個体が野菜ほ場での発生源になっていると考えられる。一般に高温多湿条件で発生が多く、卵から成虫までの発育期間が 25～30℃で 5～7 日と短いため、短期間で高密度になる。施設では冬期間でも発生する。

（３）防除対策

成長点の奇形や萼(ガク)の加害痕を目安に、登録のある薬剤で防除する。ダニ剤の効果は高いが、卵から成虫までの発育期間が短いため、散布ムラがあると、すぐに個体数が回復し被害が止まらないので、丁寧な散布が必要となる。

なお、イチゴの果実被害は、アザミウマ類による被害果とよく似ているため、ルーペや実体顕微鏡等でどちらの寄生かを確認しないと、薬剤選択を誤ることがあるので注意する。

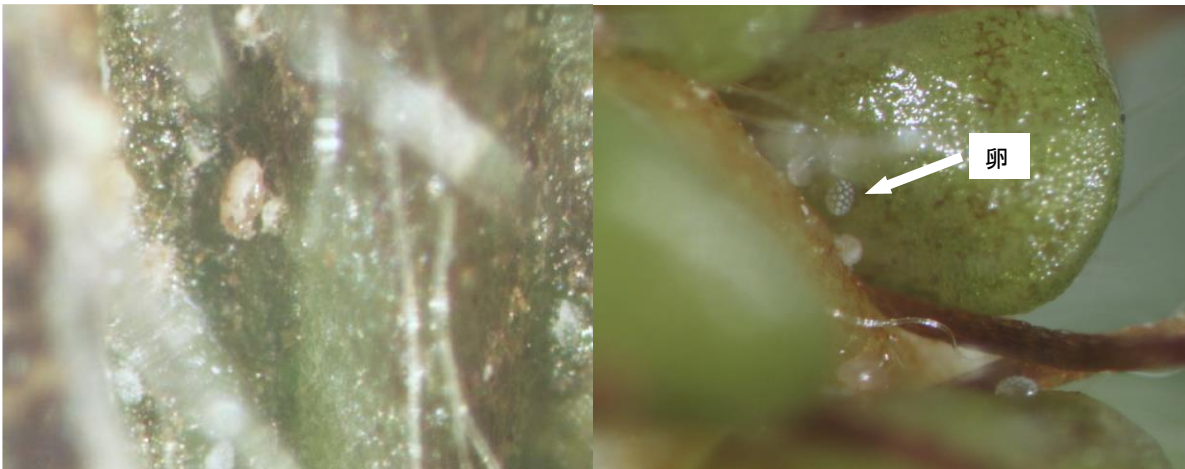


写真1 チャノホコリダニ成虫

写真2 チャノホコリダニ卵



写真3 チャノホコリダニのイチゴ果実被害

写真4 チャノホコリダニのナス果実被害



写真5 チャノホコリダニによるイチゴ葉の奇形化

シクラメンホコリダニ *Phytonemus pallidus* (Banks)

(1) 本県での発生状況

シクラメンなどの花き類、イチゴ、ピーマン等の施設野菜類などで発生が見られる。

(2) 形態及び生態、被害の様子

成虫はチャノホコリダニとよく似ていて、大きさは雌で0.2mm程度。卵の形態が半透明の長卵形でチャノホコリダニの卵と異なるので、見分けることが出来る。卵から成虫までの発育期間が27℃で約7日と短い。成・幼虫が芽の中や蕾と萼の間などに寄生し、芽の奇形化や、花卉の奇形化・変色などを引き起こす。被害症状は、チャノホコリダニと区別が付かない。成幼虫は動きが早く、光を嫌うためイチゴなどの被害果を観察しても見つからないことがある。

(3) 防除対策

成長点の奇形を目安に登録のある薬剤で防除する。チャノホコリダニと同様に卵から成虫までの発育期間が短いため、散布ムラがあると、すぐに個体数が回復し被害が止まらないので、丁寧な散布が必要となる。

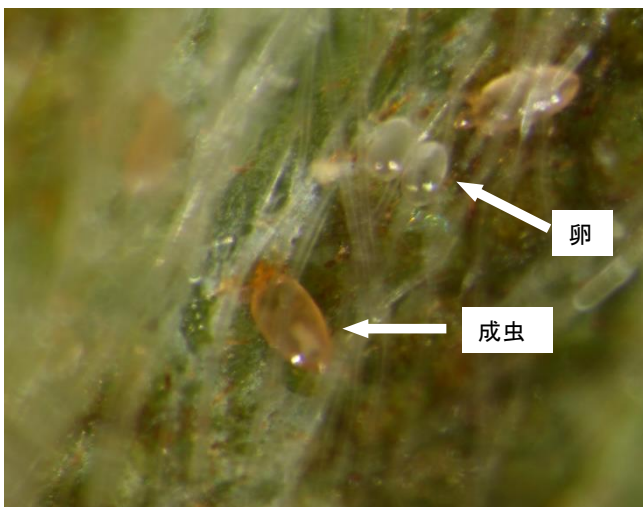


写真6 シクラメンホコリダニ成虫と卵



写真7 シクラメンホコリダニによるイチゴ葉の奇形化

ホウレンソウケナガコナダニ *Tyrophagus similis* (Volgin)

ケナガコナダニ *Tyrophagus putrescentiae* (Schrank)

(1) 本県での発生状況

ホウレンソウ、キュウリ、カボチャ、トマトなどで、春季のハウス栽培で発生が多く見られ、露地栽培では少ない。

(2) 形態及び生態、被害の様子

体長は雌で 0.4~0.7mm 程度、体色は乳白色で胴部背面に長毛がある。ホウレンソウケナガコナダニとケナガコナダニは酷似しており、加害植物種も重複している。発育適温は 25~28℃、適温下では約 10 日で卵から成虫になる。発生源はほ場内の残渣などの有機物で、まず、土壌中での密度が高まり、その後加害植物に移ると考えられている。寄生すると、吸汁加害により新葉が縮葉、奇形化する。特にホウレンソウで被害が大きく、縮葉、奇形化のほか、新葉に小さな穴があいたり、展開葉にこぶ状の小突起を生じる。加害の激しい場合には生育が阻害され、枯死に至ることがある。

(3) 防除対策

例年発生するほ場では切りわらや敷きわら等の使用を避ける。成長点の縮葉や奇形を目安に登録のある薬剤で防除する。



写真8 ケナガコナダニ類成虫



写真9 ケナガコナダニ類による
ホウレンソウの被害

ハクサイダニ *Penthaleus erythrocephalus* Koch

ムギダニ *Penthaleus major* (Dugès)

(1) 本県での発生状況

ハクサイや施設後作の小松菜、シュンギクなど秋から春にかけて栽培される葉菜類で被害が発生することがある。

(2) 形態及び生態、被害の様子

雌成虫は胴長 1mm 内外で、胴部が黒く、脚は橙赤色の大型のダニである。加害を受けた作物は葉緑素が抜け、銀灰色となって萎れる。白菜などの結球野菜では、結球部に侵入して加害するため、商品価値が著しく低下する。また、幼植物のうちに加害を受けると、萎凋して枯死する。夏は卵で休眠し、10~11 月頃に孵化する。幼虫は植物体を加害しながら 12 月頃に成虫となり、この成虫が春まで産卵する。光を嫌い、日中は加害植物の近くの土壌中にいるため、被害葉を探しても虫は見つからない。ハクサイ

ダニとムギダニは酷似しているが、ハクサイダニはハクサイやホウレンソウ等の野菜を主に加害するのに対し、ムギダニはムギ類やイネ科牧草、マメ科牧草等を主に加害する。

(3) 防除対策

例年発生するほ場では作付け前に雑草や残渣の除去を徹底し、夏季にビニール被覆による蒸し込みをする。被害が確認されたら速やかに登録のある剤で薬剤防除する。



写真10 小松菜幼苗での被害状況



写真11 ミズナの被害状況



写真12 ムギダニ成虫

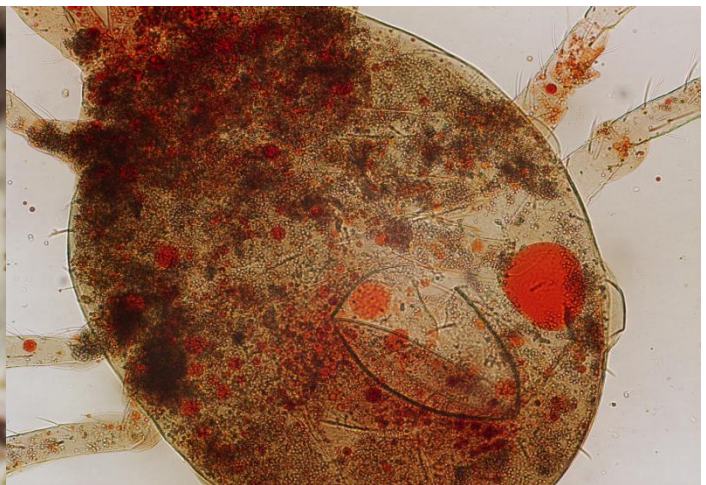


写真13 ムギダニ成虫腹部背面（毛が細長くまばら）

トマトサビダニ *Aculops lycopersici* (Masse)

(1) 本県での発生状況

トマト、ミニトマトで希に寄生が見られる。

(2) 形態及び生態、被害の様子

極めて微小なダニで、雌成虫の体長は0.18mm内外。体色は黄褐色、脚は2対で、前体部にある。ジャガイモやナスなどナス科作物に寄生する。寄生密度が高くなると、茎はほこりをかぶったようにくすんだ黄褐色を呈し、果実ではサビ症状を示す。1世代の経過時間が25℃で6～7日と短いため、急激に増殖する。1986年に沖縄県で初めて発見された侵入害虫で、現在では本州以南の日本各地に分布する。日本における生態は明らかになっていない。

(3) 防除対策

ほ場内での分布は不均一で発生初期には1～2カ所の坪状に発生することが多い。発生を確認しだい薬剤防除を実施する。薬剤の効果は高いが、散布むらがあると短期間で急激に増殖し、再発しやすいので、丁寧な散布を行う。



写真14 トマトサビダニ成虫



写真15 葉柄に寄生するトマトサビダニ
(黄褐色に見える微小なものがトマトサビダニ)



写真16 トマトサビダニの加害を受けた頂芽



写真17 トマトサビダニの加害を受けた果実